

青年期の適応状態と幼児教育関連施設での生活との関連の探索

Exploring the relationship between adolescents' adjustment and the way of daily life when they were children in early childhood education and care facilities.

植村 善太郎

Zentaro UEMURA

福岡教育大学 学校教育研究ユニット

(令和4年9月30日受付, 令和4年12月20日受理)

Abstract

The purpose of this study was to clarify the process by which early childhood life influences adjustment in adolescence. Five hundred high school, college (excluding junior college), and vocational school students (mean age 20.56 years, $SD=2.72$, minimum age 15 years, maximum age 30 years) were surveyed online. Correlation analysis of the scales revealed that: 1) respectful interactions with children in early childhood were positively related to their adjustment in elementary school life, and 2) adjustment in elementary school life was positively related to self-esteem and social skills in adolescence. The relationship between early childhood life and adolescent life was discussed.

キーワード: 就学前施設, 小学校, 青年期, 自尊感情, 社会的スキル

Keywords: pre-school facilities, elementary school, adolescent, self-esteem, social skills

問 題

幼児期の過ごし方がその後の人生にどのような影響を与えるかは、子どもの教育・養育を考える上では、重要なテーマである。しかし、幼児期の過ごし方、特に幼稚園や保育所などの施設（まとめて、「幼児教育関連施設」とする）での過ごし方が中長期的に子どもに及ぼす影響について、本邦においては知見の蓄積が多くないのが実情のようである（植村, 2021）。

そうした問題意識のもと、植村（2021）では、小学校1年生の子どもを持つ母親を対象に、幼児教育関連施設での子どもの過ごし方、そして、現在の子どもの様子について尋ね、幼児期の過ごし方と小学校1年時の様子との関連が検討された。その結果として、施設の方針や対応が、子どもを尊重したものであるほど小学校入学後の学業及び

対人関係での適応度が高い傾向にあることが見いだされた。また、施設の方針や対応が、規律・学習を重視する程度は、就学後の適応度との相関関係が不明確であった。この結果から、小学校入学後の子どもの適応状態には、幼児教育関連施設において子どもを尊重した対応をとる程度が相対的には重要性が高いと考察された。

ただしこの研究には、いくつかの課題がある（植村, 2021）。まず、データが母親のみから得られており、実際に子どもが施設で体験したこと、施設が実際に提供したこと、そして子どもの就学後の主観的な適応状態は把握されていなかった。

また、使用された尺度は、この研究のためにすべて独自に開発したもので、尺度としての妥当性は今後の検討が必要である。

さらに、植村（2021）では挙げられていない課題として、より長期的な効果の検討も望まれよ

う。すなわち、幼児期の過ごし方と就学直後の適応状態との関連に加えて、青年期の適応状態との関連も、教育・養育の在り方を考える上では確認しておくべき事項であろう。

そこで、本研究は、青年期の学生を対象に、幼児教育関連施設での過ごし方、小学校での状態、そして現在の状態について尋ね、幼児期の過ごし方、小学生時の様子、そして現在の様子との関連を、植村(2021)で使用された尺度を用いて検討することにした。この方法では、幼児教育関連施設が提供していた教育・保育を客観的に把握すること、そして本人の行動や状態を客観的に捉えることは難しく、さらに過去の状態を現在の視点から評価することによる不正確さは避けられないものの、簡易に縦断的なデータをとることができる点を重視して、この方法を採用した。

方法

調査の方法

楽天インサイト(株)を活用して、就学前に幼児教育関連施設に通っていた経験がある高校生、大学生(短期大学生は除く)、専門学校生500名(男子高校生23名、女子高校生77名、男子大学生100名、女子大学生100名、男子専門学校生100名、女子専門学校生100名、平均年齢20.56歳、 $SD=2.72$ 、最小値15、最高値30)からネット調査により回答を得た。

人権への配慮として、回答結果は調査会社における「個人情報保護方針」に則って取り扱われ、プライバシーが侵害されるおそれがないことが説明された。そして、それに同意を得た上で調査を実施した。

調査内容

(1) デモグラフィック

回答者の性別、年齢は調査会社が保有しているデータを使用したもので、項目としては設定しなかった。

就学前に幼児関連施設に通っていたか確認した。また、高校生あるいは大学生などの現在の立場を尋ねた。

(2) 幼児教育関連施設での生活

第1に、就学前に通っていた施設の教育あるいは保育の方針、施設の雰囲気、教育あるいは保育の内容について尋ねた。植村(2021)で用いられていた14項目をほぼそのまま使用したが、元尺度では母親が回答するので、例えば「子どもが行

くのを楽しみにしていた」となっていた項目は、本研究では本人が回答しやすいように「自分は、そこに行くのを楽しみにしていた」といったように修正した。こうした修正を全体に施した。遊びが中心だったか、文字などの学習が多かったか、子どもの自主性を尊重していたか、信頼できたかといった項目(Table 2)について、「ぜんぜん違う」(1点)から「非常にそうだ」(6点)の6件法で評定させた。

第2に、幼児教育関連施設で褒められた経験を測定するために、独自に作成した14項目を設定した(Table 1)。回答は、「全くなかった」(1点)から「たくさんあった」(5点)の5件法で評定させた。

Table 1 幼児教育関連施設での褒められ経験の項目

先生の話きちんとして聞いて、ほめられた
一つのことにと粘り強く取り組んでほめられた
新しいことにチャレンジして、ほめられた
運動会で頑張ってほめられた
先生の手伝いをしてほめられた
発表会で頑張ってほめられた
苦手なことを頑張ったことをほめられた
掃除や遊びのあとの片付けを真面目にやってほめられた
友達を手助けしてほめられた
自分より小さい子どもの世話をして、ほめられた
元気に外で遊んでほめられた
絵をほめられた
粘土を使った工作など、作ったものをほめられた
歌や踊りといった表現をほめられた

本人の自尊感情やそれを基礎とした意欲には、他者から褒められる経験が重要であることはよく知られている。本研究では、本人のその後の状態を予測する要因の一つとして、施設の職員、先生から褒められた経験の頻度を尋ねることにした。

(3) 小学生生活での適応

小学生時代の生活適応の様態を、植村(2021)で開発された12項目の文末を過去形にしたものと、独自に開発した表現活動を楽しむ程度に関する3項目とで尋ねた(Table 4)。3項目は、「絵を描くのが好きだった」、「工作のような何かを作る活動が好きだった」、「歌や踊りのような活動が

Table 2 施設の方針に関する項目の因子分析結果（最尤法，プロマックス回転後）

	項目	F1	F2
F1	13.信頼できる施設だった	.90	-.04
子ども尊重 ($\alpha=.93$)	14.いい先生（スタッフ）が担当してくれた	.87	-.02
	11.子ども同士の仲が良かった	.84	-.04
	12.スタッフ同士の仲が良さそうだった	.79	.06
	9.子どもの自主性を引き出す努力がされていた	.77	.14
	10.子どもが行くのを楽しみにしていた	.77	.02
	8.子どもの意見や考えを，担当スタッフはよく聞いていた	.72	.07
	1.子どもの遊びが時間の多くを占めていた	.63	-.11
	3.屋外での活動が多かった	.60	.09
	5.のんびりしていた	.56	-.17
	F2	6.きっちりしていた	.04
規律・学習の重視 ($\alpha=.75$)	7.厳しかった	-.26	.77
	2.文字，算数，楽器，体育などをみんなで規律正しく学ぶことが多かった	.23	.56
	4.スポーツなどの専門の指導者が教えることが多かった	.01	.56
因子間相関 F2		.28	

好きだった」であった。質問項目に対して、「ぜんぜん違う」(1点)から「非常にそうだ」(6点)の6件法で評定させた。

(4) 青年期（現在）の適応状態

第1に，現在の適応状態の一つの指標として，自尊感情を尋ねた。10項目の自尊感情尺度(Rosenberg, 1965, 日本語訳 山本, 2001)を設定し，「当てはまらない」から「当てはまる」までの5件法で回答させた (Table 5)。

第2には，社会性，他者とのコミュニケーション力の程度を測定するために，社会的スキル尺度を設定した。社会的スキル尺度としては，菊池(1988)によるKiSS-18を次の点を修正した尺度を用いた。1) 1つの項目では，「仕事の目標や計画を…」となっているが，サンプルが学生中心であることを踏まえ「仕事（や学習）の目標や計画を…」に修正した。2) 元尺度は「いつもそうさ」から「いつもそうでない」の頻度に関する5件法で回答させているが，本研究では調査デザインの都合で，「当てはまらない」から「当てはまる」までの5件法で回答させた (Table 6)。

結果

以下，データ分析には，清水(2016)のHAD Version17.20を用いた。

尺度の検討

(1) 幼児教育関連施設での生活

施設の方針 因子分析（最尤法，プロマックス回転）を実施し，固有値の減衰状況，因子構造の解釈しやすさを考慮して，2因子を抽出した (Table 2)。

植村(2021)において，第2因子に高く負荷した2つの逆転項目が第1因子に含まれるようになった以外は，ほぼ同様の構造が得られた。第1因子は，施設およびスタッフが信頼できたこと，子どもの意見や考えが尊重されていたこと，子どもが施設を好んでいたことに関する項目が集まっており，子どもを大切にしたい信頼される運営をしていたことと捉え，「子ども尊重」と命名した。この因子に最も高く負荷した項目で下位尺度を構成した ($\alpha=.93$)。

第2因子は，厳しくきっちりしていたこと，文字や算数の学習を規律正しく学ぶこと，スポーツなどの専門指導者の来園が多かったことなどが集まっており，「規律・学習の重視」と命名した。

Table 3 施設での褒められ経験に関する項目の因子分析結果（最尤法）

項目	$\alpha=.96$	F1
9. 友達を手助けしてほめられた		.83
7. 苦手なことを頑張ったことをほめられた		.82
6. 発表会で頑張ってほめられた		.81
14. 歌や踊りといった表現をほめられた		.81
8. 掃除や遊びのあとの片付けを真面目にやってほめられた		.81
3. 新しいことにチャレンジして、ほめられた		.80
2. 一つのことに粘り強く取り組んでほめられた		.79
13. 粘土を使った工作など、作ったものをほめられた		.79
11. 元気に外で遊んでほめられた		.77
5. 先生の手伝いをしてほめられた		.76
4. 運動会で頑張ってほめられた		.76
1. 先生の話をしっかり聞いて、ほめられた		.74
10. 自分より小さい子どもの世話をし、ほめられた		.74
12. 絵をほめられた		.71

この因子に最も高く負荷した項目で下位尺度を構成した ($\alpha=.75$)。

施設での褒められ経験 因子分析（最尤法）を実施し、固有値の減衰状況、因子構造の解釈しやすさを考慮して、1因子を抽出した（Table 3）。

尺度項目には、褒められる理由として、社会的に望ましい行為（「友達を手助けしてほめられた」など）、活動へのまじめな取り組み（「一つのことに粘り強く取り組んでほめられた」）、表現活動（「歌や踊りといった表現をほめられた」）など様々なものが含まれていたが、結果としては明瞭な1因子構造であった。領域は問わず、子どもの行いを「褒める」という行為がどの程度施設内に根付いているかどうかということなのかもしれない。14項目を合成して褒められ経験尺度を構成した ($\alpha=.96$)。

(2) 小学生生活での適応

因子分析（最尤法、プロマックス回転）を実施し、固有値の減衰状況、因子構造の解釈しやすさを考慮して、3因子を抽出した（Table 4）。植村（2021）で使用された12項目は、そこでの結果と共通した2つの因子に分かれた。本調査で追加した3つの項目は、独自の第3因子に高く負荷した。

第1因子は、学校での対人関係の良好さが共通した要素であると考え、「対人関係への適応」と

名付けた。この因子に最も高く負荷した項目で下位尺度を構成した ($\alpha=.87$)。

第2因子は、学習への取組が良好であることが共通性となっていると考え、「学業への適応」と名付けた。この因子に最も高く負荷した項目で下位尺度を構成した ($\alpha=.85$)。

第3因子は、表現活動を楽しめる度合いが共通性となっていると考え「表現活動への適応」と名付けた。この因子に最も高く負荷した項目で下位尺度を構成した ($\alpha=.75$)。

(3) 青年期（現在）の適応状態

自尊感情尺度 自尊感情尺度10項目に因子分析（最尤法、プロマックス回転）を実施し、固有値の減衰状況、因子構造の解釈しやすさを考慮して、2因子を抽出した（Table 5）。

第1因子には、現在の自己に対する満足感、価値づけ、肯定的な態度を示す項目が負荷しており、「積極的自尊感情」とした。ただし、第8項目「もっと自分自身を尊敬できるようになりたい」は意味内容的には第2因子に付加した項目群とも近く、因子との関わりも第1因子と第2因子両方と同じ程度にあった。この第8項目の課題は以前から指摘されており（例えば、田中、2011）、そうした問題が本研究においても確認されたといえる。本研究では、 α 係数が.82確保され、項目

Table 4 小学生生活の様子に関する項目の因子分析結果（最尤法，プロマックス回転後）

項目	F1	F2	F3
F1 4. 学校での友だちは多いほうだったと思う	.94	-.19	-.02
対人関係へ 10. 友だちとのコミュニケーションがうまいほうだったと思う	.84	-.04	-.01
の適応 3. 学校で、仲のいい友だちがいた	.69	.11	.01
($\alpha=.87$) 5. 放課後に、友だちとよく遊んでいた	.64	.03	-.04
2. 学校に行くのは、いやではなかった	.63	.11	-.04
12. 家族の中で、よく話をするほうだったと思う	.41	.26	.08
8. 家で、学校の話をよくしたと思う	.37	.35	-.03
F2 7. 学校の各科目のテスト結果は、全般的に良好だったと思う	-.14	.98	-.05
学業への適 1. 学校の授業はよく理解できていた	-.05	.87	-.06
応 9. 宿題はきっちりと行っていた	.05	.63	.01
($\alpha=.85$) 6. 学校の先生から、ほめられることが多かった	.29	.51	.07
11. 国語は得意な方だったと思う	.12	.43	.20
F3 13. 絵を描くのが好きだった	-.05	-.03	.86
表現活動へ 14. 工作のような何かを作る活動が好きだった	-.08	.01	.83
の適応 15. 歌や踊りのような活動が好きだった	.28	-.04	.41
($\alpha=.75$)			
因子間相関 F1		.66	.50
F2			.48

Table 5 自尊感情尺度項目の因子分析結果（最尤法，プロマックス回転後）

項目	F1	F2
F1 1. 少なくとも人並みには、価値のある人間である	.83	.04
積極的自尊 2. 色々な良い素質をもっている	.78	.00
感情 4. 物事を人並みには、うまくやれる	.73	.07
($\alpha=.82$) 6. 自分に対して肯定的である	.68	-.13
7. だいたいにおいて、自分に満足している	.63	-.14
8. もっと自分自身を尊敬できるようになりたい	.41	.38
F2 10. 何かにつけて、自分は役に立たない人間だと思う	-.03	.84
自己への悲 9. 自分は全くだめな人間だと思うことがある	-.03	.77
観的見方 5. 自分には、自慢できるところがあまりない	-.03	.68
($\alpha=.84$) 3. 敗北者だと思うことがよくある	.00	.67
因子間相関 F2	-.20	

内容的にも第1因子に負荷した他の項目群と矛盾するわけではないと考え、除外しなかった。第8項目も含め、この因子に最も高く負荷した項目で下位尺度を構成した ($\alpha=.82$)。

第2因子は、自己への悲観的な見方を示す項目が共通して高く負荷した。「自己への悲観的見方」と名付けた。この因子に最も高く負荷した項目で下位尺度を構成した ($\alpha=.84$)。

Table 6 社会的スキル尺度項目の因子分析結果（最尤法）

項目	$\alpha=.95$	F1
8. 気まずいことがあった相手と、上手に和解できるほうだ		.77
7. こわさや恐ろしさを感じた時に、それをうまく処理できるほうだ		.77
4. 相手が怒っている時に、うまくなだめることができるほうだ		.77
6. 周りの人たちとの間でトラブルが起きても、それを上手に処理できるほうだ		.76
11. 相手から非難されたときにも、それをうまく片付けることができるほうだ		.73
12. 仕事（や学習）の上で、どこに問題があるのかすぐに見つけることができるほうだ		.72
10. 他人が話しているところに、気軽に参加できるほうだ		.72
14. あちこちから矛盾した話が伝わってきても、うまく処理できるほうだ		.72
2. 他人にやってもらいたいことを、うまく指示することができるほうだ		.72
15. 初対面の人に、自己紹介が上手にできるほうだ		.72
3. 他人を助けることを、上手にやれるほうだ		.71
18. 仕事（や学習）の目標や計画を立てるのに、あまり困難を感じないほうだ		.67
1. 他人と話していて、あまり会話が途切れないほうだ		.67
9. 仕事（や学習）をする時に、何をどうやったらよいか決められるほうだ		.67
5. 知らない人でも、すぐに会話が始められるほうだ		.65
17. まわりの人たちが自分とは違う考えを持っていても、うまくやっていけるほうだ		.62
13. 自分の感情や気持ちを、素直に表現できるほうだ		.61
16. 何か失敗した時に、すぐに謝ることができるほうだ		.58

社会的スキル尺度 次に、社会的スキル尺度 18 項目に因子分析（最尤法）を実施し、固有値の減衰状況、因子構造の解釈しやすさを考慮して、1 因子を抽出した（Table 6）。

KiSS-18 開発者である菊池（2004）によると、尺度項目には、1) 初歩的なスキル、2) より高度のスキル、3) 感情処理のスキル、4) 攻撃に代わるスキル、5) ストレスを処理するスキル、6) 計画のスキルの 6 領域から 3 項目ずつが含まれている。しかし、本研究での結果としては比較的明瞭な 1 因子構造が得られた。大きく見れば、社会的スキルには一般性があるということなのかもしれない。18 項目を合成して社会的スキル尺度を構成した ($\alpha=.95$)。

各尺度の得点は総和して、項目数で除することで 1 項目あたりに換算した。各尺度の記述統計量は Table 7 のようになった。

尺度間の関連の検討

ここまで構成した尺度間の関係を確認するために、相関分析を行った (Table 8)。相関係数は、ほぼ無相関から中程度の相関係数に収まって

おり、各尺度には一定の独立性があることが確認された。以下、就学前、小学校時代、そして現在の青年期という 3 つの時点間での関連を相関係数から検討した。

(1) 幼児教育関連施設での生活と小学生時代の適応との関連

小学生時代の対人関係及び学業への適応感は、類似した相関パターンを示しており、就学前の幼児教育関連施設の子ども尊重方針であること、そして、施設内での褒められ経験頻度と相対的に高い相関係数を示した。表現活動への適応については、上の二つに加えて、幼児教育関連施設の規律・学習重視も相対的に相関係数が高くなった。

(2) 小学生時代の適応と青年期での適応との関連

現在の積極的自尊感情尺度は、小学生時代の 3 つの適応感いずれとも低いあるいは中程度の相関係数をしめした。自己への悲観的な見方は、小学生時代の学業への適応と低い正の相関係数を示しただけであった。社会的スキルについては、3 つの適応感いずれも低い、あるいは中程度の正の相関を示した。

Table 7 各尺度の記述統計量

	変数名	平均値	中央値	SD	最小値	最大値
就学前	子ども尊重	4.23	4.20	0.89	1.00	6.00
	規律・学習の重視	3.34	3.25	0.99	1.00	6.00
	褒められ経験	3.51	3.43	0.83	1.00	5.00
小学生時代	対人関係への適応	4.19	4.00	0.97	1.00	6.00
	学業への適応	4.37	4.40	1.02	1.00	6.00
	表現活動への適応	3.82	4.00	1.19	1.00	6.00
現在(青年期)	積極的自尊感情	3.45	3.50	0.75	1.00	5.00
	自己への悲観的見方	3.26	3.25	0.91	1.00	5.00
	社会的スキル	3.17	3.11	0.78	1.00	5.00

N=500

Table 8 尺度間の相関行列表

	1)	2)	3)	4)	5)	6)	7)	8)
1)子ども尊重	1.00							
2)規律・学習重視	.23 **	1.00						
3)褒められ経験	.58 **	.27 **	1.00					
4)対人関係への適応	.59 **	.17 **	.54 **	1.00				
5)学業への適応	.51 **	.18 **	.48 **	.67 **	1.00			
6)表現活動への適応	.34 **	.20 **	.40 **	.45 **	.44 **	1.00		
7)積極的自尊感情	.37 **	.19 **	.42 **	.53 **	.46 **	.36 **	1.00	
8)自己への悲観的見方	.07	.13 **	.11 *	-.01	.10 *	.07	-.15 **	1.00
9)社会的スキル	.30 **	.26 **	.44 **	.49 **	.38 **	.34 **	.65 **	.03

N=500, ** $p < .01$, * $p < .05$

隣接する時点間の相関係数を太字で表した。

考 察

幼児教育関連施設での生活と小学校生活での適応との関連

Table 8 に示されたように、就学前の施設において、子どもを尊重した、いわば「あたたかい」関わりが行われていること、そして褒められ経験頻度が高いことが、小学校での子どもの学業、対人関係、そして表現活動への適応にプラスに関連していることが相関分析から見いだされた。

その一方で、学習や規律を重視した方針は、子どもの小学校での学業、対人関係、そして表現活

動への適応との相関が相対的に低かった。しかし、表現活動への適応については、わずかではあるが相関係数が高くなっており、幼児教育関連施設での学習経験が表現領域では影響力を持っている可能性が示唆された。

植村(2021)では、母親を対象として調査が行われていたが、共通して使用された尺度間の関係についてはほぼ同様の結果が確認されたといえる。ここでも、幼児期における子どもを尊重した関わりが小学校入学後の子どもの生活適応に関連することが明らかになった。これは、Heckman(2013)による考察と一致した方向性を持つもの

といえる。子どものより良い発達のために、子どもの自主性を重視した保育および教育が重要であることが示されたと考えられる。

本研究では、規律・学習を重視した方針の役割について、新たな可能性が示唆された。今後の研究において更なる確認が求められる。

小学校生活での適応と青年期の自尊感情及び社会的スキルとの関連

自尊感情のうち肯定的な意味を持つ積極的自尊感情は、小学生時代の3つの適応感いずれとも有意な相関を示した。中でも、対人関係への適応感との相関係数は.53で、時間的な隔たりが大さいにもかかわらず、小さくない関連性を持っていることが示された。自分に対する否定的な見方を示す、自己への悲観の見方については、学業への適応感が有意ではあるものの極めて低い相関($r=.10$)を示したが、他の相関係数は有意には至らなかった。自己への悲観の見方は同一時点の積極的自尊感情や社会的スキルとも関連性が低く(Table 8)、現実の生活実態とは関連しない他の要因(例えば「気質」など)の影響下にある変数なのかもしれない。

社会的スキルについては、積極的自尊感情が示した相関パターンと類似しており、小学校時代の3つの適応感と関連をしていたが、対人関係への適応との相関係数が相対的に高くなった。小学校時代に対人関係がうまくいっていた人は、その後の人生の中でも人とかかわる機会が多くなり、社会的スキルが磨かれていくということなのかもしれない。

幼児期から青年期までの要因間の関わり

青年期の積極的自尊感情、そして社会的スキルに関しては、小学校時代の3つの適応感が一定の関連性を有していた。そして小学校時代の3つの適応感、幼児教育関連施設での子ども尊重の方針、そしてそこでの褒められ経験頻度に特に関連性が高いことが相関分析から示された。子どもを尊重した関わり的重要性が確認されたといえる。

本研究の課題

本研究では、青年期の調査参加者に、過去については回想させてその記憶を頼りに回答させた。したがって、回答には、記憶の再構成や現在の状態と整合する形で過去についても回答するといった歪みが含まれていることは否定できない。こうした問題を払しょくするためには、施設から直接

得たデータを分析に含める、縦断調査デザインを採用するなど、他の方法を使つての結果の確認が求められよう。

また、本研究で使用した尺度項目の一部は、この研究のために独自に開発したものであった。各尺度の内的整合性は確認されているものの、尺度としての妥当性については、本研究においては検討するに至っていない。今後の継続的な検討が求められる。

また、本研究では、相関分析に基づいて、時点間の変数間関係を検討した。しかし、相関であり、しかも個人の一時点からの回想データであることから、影響関係の方向性は「過去から未来」だと言い切れないところがある。さらに、今回の結果全体に影響している例えば、「気質」のような個人差もないとはいえない。今後は、分析手法をより洗練するとともに、気質のような個人差をあらかじめ研究デザインに組み込んで、その影響を統制した分析が望まれる。

引用文献

- 菊池章夫(1988). 思いやりを科学する 川島書店
 菊池章夫(2004). KiSS-18 研究ノート 岩手県立大学社会福祉学部紀要, 6(2). 41-51.
 Heckman, J. J. (2013). Giving Kids a Fair Chance. Boston: MIT Press.
 (ヘックマン, J. J. 古草 秀子(訳) 大竹文雄(解説)(2015). 幼児教育の経済学 東洋経済新聞社)
 Rosenberg, M. (1965). Society and the adolescent self-image. Princeton, NJ: Princeton University Press.
 清水裕士(2016). フリーの統計分析ソフト HAD: 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.
 田中道弘(2011). 自尊心研究の補足: Rosenberg (1965) の様々な邦訳版と今後の課題など 田中道弘のホームページ Retrieved from <http://self-esteem.life.coocan.jp/> (2022年9月30日)
 植村善太郎(2021). 小学校での生活と幼児教育及び保育施設の方針との関連の探索 福岡教育大学紀要, 第四分冊, 教職科編, 71, 75-80.
 山本真理子(編)(2001). 心理測定尺度集 I 一人間の内面を探る〈自己・個人内過程〉. サイエンス社